

活字の海で

多彩な衣装まとう経済理論

学説史から全体像つかむ

複雑に分かれた経済学の全貌をつかむのは難しい。道に迷いつつなるとき、出発点に戻ってみるのは一つのやり方だ。

野原慎司の3人の専門家による『経済学史』

(2019年7月、日本評論社)は、多岐に

わたる学説の概略と時代背景を解説する書

で、古代・中世の経済思想を起点に、古典派

経済学、マルクス経済学を中盤に置き、ケイ

ンス経済学、計量経済学、ゲーム理論、行動

経済学まで網羅している。野原氏は「さまざ

まな経済理論の位置付けを知り、経済理論の

地図を理解すると、複雑な経済現象を把握す

るまでの困難を解消する一助になり、経済

理論の生きた理解につながる」と説明する。

現在の主流派である「新古典派経済学」を

批判する立場から経済思想の歴史を検証する

のは、有江大介著『反・経済学入門: 経済学

は生き残れるか』(19年7月、創風社)。『労

働、契約、所有、幸福、グローバルゼーショ

ン、おカネといった経済・社会を読み解くキ

ーワードを軸に経済思想の歴史を整理し、ア

ダム・スミスを始とする主流派経済学がど

んな基盤の上に成り立っているのかを浮き彫

りにする。例えば「労働」の章では、「労働

が苦痛で避けるべきものだ」という考え方は、

経済学を生み出した西欧思想の中にはじめか

ら存在している。こうした歴史の確認は「日

本やアジアの伝統的な価値観や考え方は異

なる現代の経済学があり方を、私たちがアジ

ヤ」と唱える。

荒谷大輔氏は『資本主義に出口はあるか』

(19年8月、講談社現代新書)で、社会契約

論で知られるジョン・ロックとジャン・ジャ

ック・ルソンの思想を対比させ、近代の社

会では、機会の平等、小さな政府を志向する

「ロック的」な局面と、結果の平等、大きな

政府の「ルソンの」な局面が循環してきたと

の見方を示す。個人の所有権を認めるロック

の議論に、アダム・スミスは人々の「共感」

という概念を導入して経済と道徳との両立を

可能にし、2人の議論をリカードが体系立て

た理論が経済学の原型になったという。

経済学史は、草創期から変わらないう経済学

の骨組みを照らし出し、さまざまに衣装をま

とつ現代経済学とどう付きあえばよいかを

教えてくれる。(編集委員 前田裕之)